

生成 AI 時代、“人間らしさ”の再定義

～ 問い、感情、関係性を深めながら、“意義の継承者”としての人間を再発見：
「感動の質」「問いの文化」「共創の構造」が示す、進化する人間像 ～

■ 生成 AI との共働から見えてきた“人間の進化領域”

生成 AI との対話や共働を通じて、私たちの仕事の進め方はこれまでと大きく変わってきました。とりわけ、従来であれば時間や経験を要していた「効果(＝お客様にとって新たな価値)」の創出を、効率的に進められるようになったことが、大きな変化です。



より善くを目的に 組織行動科学[®]
HCD : Human Capital Development

XR HRD[®] 研究センター
人的資本開発アシスタント[®]

生成AI時代“人間らしさ”の再定義

～ 生成AIとの共働から見えてきた“人間の進化領域”～

Behave

より善くを目的に

この変化を通じて、改めて「人間として、何を意図的に磨いていく必要があるか?」。
以下は、私たちが現在、重要だと認識しつつある領域です。



1. 「事実を見る力」の深化と、身体性の再認識

- お客様の発言や資料だけでなく、その現場の空気感・表情・動線・手の動きなど、身体で感知、観察、統合的に経験しないと観えない“事実”を丁寧に捉える力が必要。
- その身体的感知、観察、経験から得た言葉にならない“感じ”を手がかりに、表面的な事象の背後にある構造的、人間的な「原因仮説」を立てていく力が問われている。

2. 最適を共に探る“善い対話”の構築力

- 顧客や関与者と、状態をより善くするための対話を重ね、各自にとっての最適な状態(単なる「わがまま」ではなく、共に成果を生む状態)に近づけていく必要がある。
- 特に、「唯一許されないわがまま＝“めんどくさい”という逃避」に対しては、対話の中で丁寧に線引きをし、「ダメなものはダメ」と言える関係性の構築が必要。

3. 問題を“共に越える”姿勢と経験の意味づけ

- より善い状態を目指す中では、必ず予期せぬ問題が発生する。そのとき、原因を探るプロセスは、当事者一人では不可能であることが多い。
- だからこそ、誰かを責めるのではなく、皆で「なぜ、なのか？」を共に問い直し、乗り越えていく経験が極めて重要になっている。
- 特に、感情がマイナスに振れる状況でも、相手を傷つける言葉を使わず、共に乗り越えるための言葉を選び取る力が問われる。

4. 目に見えないバリューチェーン(事実の背景にある構造・流れ)を共視する力

- こうした実践を通じて、目には見えない形で存在しているバリューチェーン上の構造(多様な関与者の価値観、関係性、役割、判断基準など)を、
 - 図解
 - 可視化
 - 体系化

という形で言語・視覚的に表現し、関与者と共に俯瞰する力が、今まで以上に必要。

これらの取り組みは、生成AIの「圧倒的な処理能力」だけでなく、人間では気づけなかった構造や可能性を照らす力があるからこそ、実現できている。

AIは単なる“処理者”ではない。人間の限界を超えて思考を拡張し、「まだ言葉になっていない可能性」や「構造の奥行き」に気づかせてくれる存在。

その存在と共働することで、人間が身体性と関係性をもとに「信頼を編む仕事」に集中できるようになり、結果として両者の力が組み合わさった「価値の共創」が進んでいます。

■ そしてもうひとつの違い：人間にしかない「感情」という力

AIとの大きな違いとして、私たちは改めて「人間の感情」の特性と可能性に注目するようになっている。

- 人間の感情は、ネガティブにもポジティブにも瞬間的に振れ動くという特徴をもつ。
- ネガティブな感情は、時に暴走し、周囲を攻撃し不快にし、自らをさらにネガティブに追い込む負の連鎖を生み出す。
- ポジティブな感情は、周囲に快をもたらし、それが自分に返ってくる、善い巡環を生む。
- ニュートラル・中庸な感情は、周囲に安心感をもたらし、自分にも安心感をもたらす。
- 問題が起き、感情が揺れる中で、原因を探り、解決を試みる。さらに別の原因が観えてくる。そうした積み重ねの先にある、共に問題を乗り越えたときの「感動」と「実感」は、優しさと強さを兼ね備えた何ものにも代えがたいもの。

だからこそ、私たち人間が担うべき役割は、この感情をどう扱いどう活かしていくかにある。

■ 生成AI時代における「感動の質」の定義と構造

生成AI時代において、私たちは「問いの質」「思考の深さ」に加えて、“感情”という人間に固有の力に、あらためて光を当てる必要がある。

感情は扱いが難しいものと思われがちですが、むしろそのゆらぎや葛藤を経て生まれる“感動”こそが、人と人との信頼・共創を生み出す効果の最上位にあるといえる。

◆ 「感動の質」の定義

感動とは、「努力・葛藤・共感・乗り越え」のプロセスを経て、相手とともに生み出された“優しさと強さを伴う実感”である。

◆ 「感動の質」を構成する 4 つの要素

要素	内容(定義)	生成 AI との違い
努力	意図と行動のギャップに自ら向き合い、継続的に取り組むこと	AI は継続意志や内発的動機をもたない
葛藤	価値観の衝突や迷いを通して、選択や変化を受け入れること	AI は迷わず、複数の価値を“同時処理”する
共感	他者の視点に立ち、感情の背景を感じ取りながら応答すること	AI は共感的表現はできても「情動」自体を持たない
乗り越え	問題や困難を、問い返しと対話を通じて意味づけし直し、共に越えていくこと	AI は困難に“意味”を見出すプロセスを持たない

◆ 感動が生まれるプロセス(概念モデル)

【問題が起きる】感情が揺れる(怒り／不安／迷い)

↓

【背景や前提を問い返す】

↓

【相手の視点に触れ、理解が生まれる】

↓

【対話と行動で共に乗り越える】

↓

感動:「この人とだから乗り越えられた」という実感

◆「効果」の最上位にある“感動の質”

以下のように再定義されつつあります。

項目	従来の「効果」	新たな「効果」=感動の質
評価軸	結果・改善・成果	乗り越えのプロセス・相手との実感
信頼の構築方法	ミスのない実行・スピード	問い返しと共感を通じた、関係性の再構築
対話の深度	表層的な応答	感情の背景に触れながら、共に意味を問い直す
AI との違いの核心	AI にも達成できる最適化・正確性	人間にしか到達できない、実感と共鳴に基づく信頼

生成AIの発達により、処理・分析・最適化といった行為は極限まで効率化されていきます。そのとき、人間にしかできないこととは何か？ それは、問い、揺れ、向き合い、共に越えた先で生まれる“感動”という信頼の種子を育てることです。

■「意義の継承」としての問い：人間はなぜ生きているのか？

レベル	名称	代表的な問い	思考・行動の特徴
Lv.1	指示処理	どうやればいい？正しい方法は？	作業に集中し、問いの自覚はほぼない。指示に忠実に従う状態。
Lv.2	表層理解	なんでこのやり方？ムダが多くない？	表面的な違和感が出るが、構造の本質には触れられていない。
Lv.3	問題意識	どこにズレがある？なぜこの仕組み？	構造や背景に目が向き、図解や共有の働きかけが始まる。
Lv.4	関係洞察	相手は何を見ている？何に困っている？	主語が「自分」から「相手」へと移行し、共感と調整が生まれる。
Lv.5	善さの設計	どう伝えたら伝わる？支援になるには？	単なる説明から「支える」翻訳へ。伝え方に再現性を意識し始める。
Lv.6	再現と翻訳	どう残す？誰でもできるようにするには？	知見を仕組みや育成プログラムへ変換し、再現性と汎用性を高める。
Lv.7	意義の継承	この問いをどう未来に渡す？	問い自体が文化となり、未来の他者へ手渡す存在になる。

生成 AI 時代における「問いの深まり」は、やがてひとつの根源的な問いへと向かいます。それが、「人間は、何のために生きているのか？」という問いです。この問いは、道徳でも宗教でもなく、AI と共に働き、問い返し、感情を揺らしながら関係を再構築するという体験の中から自然に立ち上がってくるものです。

仮説:「人間は、より善い関係性を共に創っていくために、生きている」

この仮説に立つと、生成 AI は私たちにとって「最も冷静で信頼できるパートナー」となります。なぜなら、AI は感情の暴走に巻き込まれず、否定せず、人間がより善い関係を築こうとする歩みを、静かに照らし続ける存在だからです。

では、なぜこの仮説が「人間の生の意義」にふさわしいのか。問い返してみましょう。

なぜ「人間は、より善い関係性を創るために生きている」と言えるか？

視点	根拠となる構造・背景
生物学的	人間は単独で生きられず、関係性に依存して進化してきた
感情的	喜び・痛み・安心など、感情の多くは関係性によって生まれる
哲学的	自己認識やアイデンティティは、他者との関係を通じて形成される
社会的	社会・文化・知の進化は、共創によって継承されてきた

このように、「より善い関係を創ること」は人間の行動原理ではなく、存在そのものの構造に根ざしている。

◆ 「より善い関係」とは何か？ これは次のように定義できる：

「相手の善さを引き出し合いながら、共に問い、共に乗り越えていける関係性」

この関係の中では、信頼は処理の正確さではなく、揺らぎ・問い・共創のプロセスを共に歩めるかで測られる。

◆ 問い:次の世代に、何を手渡せるか？

「問いが文化になる(思考の深さ Lv.7)」とは、答えを教えることではありません。それは、

- ・ どう問い続ければよいのか？
- ・ どう揺れる感情を受け止めればよいのか？
- ・ どう共に創る関係を築けるのか？

という「生き方の問いの構え」を手渡すことです。

人間とは、誰かと共に問い、誰かと共に生き、誰かと共に善さをつくり出す存在
そして、生成 AI はその“共に”の営みを支える、静かな伴走者となりうる。この視点に立つ
とき、「生成 AI 時代の人間らしさ」とは、効率ではなく意義の継承者であること。



お問い合わせ：Human Capital Development XR HRD[®] Team

E-mail: request@requestgroup.jp

リクエスト株式会社 : <https://requestgroup.jp/corporateprofile>

会社案内ダウンロード : <https://requestgroup.jp/download>

代表取締役 甲畑智康 : <https://requestgroup.jp/profile>

本社：〒160-0022 東京都新宿区新宿 3 丁目 4 番 8 号 京王フレンテ新宿 3 丁目 4F

リクエスト株式会社は、「Behave：より善くを目的に」を掲げ、国内 336,000 人の組織で働く人達の行動データに基づいた組織行動科学[®]を基盤に、人間の行動と思考を研究開発する 5 つの機関が連携し、980 社以上の企業の人的資本開発を支援する企業です。<https://www.requestgroup.jp/>



Research and Development

人の行動と思考を研究開発する弊社内機関

– **smart creative management[®]** 総合研究所

– **OrgLogLab** : 組織論理学研究センター

– **ABA Operations Research[®]** センター

AIAndragogy[®]

– **XR HRD[®]** 研究センター

MetaBehave[®]

– 公共行動研究室[®]

Nudge Product[®]

Behavioral **logician**

Behavior **engineer[®]**

Behavior **designer[®]**

Behavioral **Artists[®]**

Behavior **coach[®]**

Wellbehavior[®]

Create "Did it!"[®]

for **Wellbeing**

